この鬼畜の
変態に天罰を!2

この鬼畜の変態に天罰を！

～あらすじ～

駄女神と共に異世界に転生した冒険者サトウカズマ。
無一文で異世界に放り出されての低辺生活の日々に
それまでニートだった彼の精神は次第に荒んでいく。

キャベツ拾いで運良く大金を手にして生活苦からは
脱出できたが始まりの街アクセルには娼館の類がなく
性欲を持て余したカズマのセクハラ行動は過激化。

女盗賊は経験豊富という先入観から知り合いのクリスを
軽い気持ちで強姦してしまうが、拘束されて無理やり
処女を奪われたクリスから本気で恨まれてしまう。

敬虔なエリス教徒であったクリスに乱暴したカズマには
女神エリスの怒りと容赦ない天罰が降りかかるのだった。

宝島(超巨大陸亀)VS機動要塞デストロイヤーの怪獣決戦に巻き込まれ、 アクセルの街を守るために魔王軍幹部たちと共闘しながらデストロイヤーの破壊には成功したのだが魔王軍との関係を疑われ、デストロイヤーによる周辺被害の総額十二億エリスの借金を背負わされてしまう。

それまでの優雅でブルジョワジーな異世界成金生活が一転、極貧生活に逆戻りとなり一発逆転を狙ったアクアは異世界知識を活かしてめぐみんとネズミ講による金儲けを企んだが国の迅速な法整備によって捕まってしまう。

アクアは不正な手段で集めた四千万エリスを元手に孵化が難しいとされるドラゴンの卵を既に購入しており、女神の力を活用してドラゴンの雛を育成することで十億エリスの儲けは堅いと力説するがそれはどう見ても鶏の卵だった。 ダクネスが貴族権力を行使したおかげでアクアとめぐみんは釈放されたものの、カズマ一行にはさらに四千万エリスの借金が加算される。

こうしてパーティ内の雰囲気がギスギスしていく中、ダクネスはパーティを抜けて冒険者を引退することを密かに決意するのだったが……。

クエストがない日の爆裂散歩はめぐみんの日課である。
ここ最近は忙しくてめぐみんの付添はしてなかったのだが
むしゃくしゃすることが多かったので気分転換がてらに
久々にめぐみんとスキンシップすることにした。

「なにしてるんですかカズマ？
　魔力を使い果たし身動き取れないいたいけな私を見て
　よからぬ事を企むとは許されませんよ」

めぐみんは全ての魔力を解き放つ爆裂魔法を使った後
しばらく動けなくなる。そのために誰かが付き添って
めぐみんをおぶって帰らなければならない。
下着を覗いたり、偶然をよそおっておしりを揉みしだくまでは
セーフらしい。では、どのへんからがアウトなのだろうか。

「ちょっ！？ な、なにをするんですか、やめっ！　やめろお！」

身動きできないめぐみんの下着をスティール（物理）してみた。
処女膜というのがどんな形をしているのか気になっていたので
いい機会だからめぐみんのをじっくり見せてもらうことにする。

「最低です、最低ですよ本当に！　恥を知るべきです！」

クリスも処女だったらしいけど、軽いセクハラのつもりで
挿入して膜を破ってしまい凄く恨まれた。
エリス教では婚前交渉ご法度だったらしい。
同じ誤ちを繰り返さないためにもこれは大事なことなのだ。

ひゃっ!!
だめです
あせっ
もみ

ちょっ

やめてください

キッ

ビク

やめっ…

にちっ

にちっ

グッ

膜の確認だけするつもりだったけど、めぐみんの匂いを
嗅いだり念入りに味を確認したりしてるうちに不覚にも
ムラムラしてきてしまった。ここんとこお金がなくて
禁欲生活続いてたからなあ。仕方ないね。

「何でカズマも脱ぐんですかっ！ 冗談はやめてください！」

早期の結婚と出産を奨励するこの世界ではめぐみんも
成人扱いである。つい最近、めぐみんが初潮を迎えたとかで
アクアが「お祝いよ！」とか酒場で騒いでたのをめぐみんが
「何のセクハラですかっ！やめてくだい！」って
必死になって止めていたこともあったっけ。

「めぐみんにも穴はあるんだよな……」

そろそろめぐみんも大人の階段を登ってもいい時期だろう。
いい加減ロリ扱いはやめてもらおうかとか本人も言ってたし。

「そこまで許すつもりはありませんから！！ 人を呼びますよ！？」

爆裂魔法は騒音が激しいので わざわざ人気のないところまで
遠出してきているのだ。いくら叫んだって誰も来ない。

「何をするかっ！　やめっ……、やめろおおおお！」

くッ…
きっ
ギッッッ
フゥ〜…
フゥ〜…

「くどいぞカズマ。
パーティーを抜けさせてもらうと何度もいったはずだ。
これ以上、お前のような男の近くにいられるか！」

ダクネスの決意は相当に固いようだった。アクアやめぐみんが必死に引き留めようとしても取り付く島もない。俺に対してやたら険悪な態度なのには思い当たる節が一つある。
ダクネスの友人であるクリスとの一件が一番の原因だろう。

あれからクリスには何度も何度も土下座した。住所不定でなかなか居所の掴めないクリスの姿を街中探し回ったり、雪の降るエリス教の教会の前で裸足のまま三日三晩、断食と懺悔の祈りを捧げて女神エリスの赦しを乞い続けたりした。

なんとかクリスから「もういいから付きまとわないで！」との言葉を貰えたのだが、それでもダクネスの機嫌が直ることはなかった。それどころかダクネスにはクリスを付け狙うストーカー扱いされたままだ。

話し合いに応じる気配のないダクネスと話をするため、とりあえずダクネスの隙をついてバインドを仕掛けることになったわけだが……。

くっ
ぶるぶる
はあ
はあ

アダマンタイト製のダクネスの鎧は鉛でできてんのかと
思うほどの重量感でうっかり自分の足の上に
落とそうものなら足の指を骨折しかねい。
こんなん日常的に身につけてよく動けるもんだと感心する。

「なっ、何をするカズマ！？」

スティールでダクネスの装備を少しずつ剥ぎ取っていく。
思ったより装備品が何気に多くてめんどくさい。
あと何回やればいいんだコレ。

「へへ、いいザマだなあダクネス！
　これからどうなるか分かってるんだろうな」

「ついに本性を現したか変質者めっ。何が話し合いだ！
　最初から私をこうやって辱めるのが目的だったのだろう！！」

「許しを乞うなら今のうちだ。どうすればいいか、わかるよな？」

「わ、私は……私はこんな辱めなんかには負けたりしないっ！」

「いい答えだ。簡単には落ちるなよ？ 楽しみが減るからなあ」

時間はかかったが、指一本触れることなくダクネスを
拘束した状態のまま素っ裸にしてみせた。

「エロい身体しやがってこのメス豚が。少しは素直になったか？」

「こんな卑劣なやり方で私を思い通りに出来ると思うなっ！
身動きさえできれば、今すぐお前を殴り倒しているところだ！」

「まだ立場の違いってもんがわかってないようだなあ？
お望み通り、今からその下品な胸に直接教えてやるよ」

ダクネスの目の前で両手をワキワキさせる。

「それ以上、近付くな！身分の差を弁えろカズマ。私は貴族だ。
お前のような下賤な奴に体を許すつもりなどない！」

「許すも何も、今のお前にそんな選択権はねえんだよ！」

ダクネスはM字開脚の状態になるのも形振り構わずに
膝を使って俺の手を払いのけようとするが無駄な抵抗だ。

「薄汚い手で触るな！くっ……！　や、止めろお……！」

ビクッ
キュッ♥
もみ
もみ
ビクン
ん♥

ダクネスの生乳を思う存分もみしだく。

「なんていやらしい手つきだ！！　汗ばんだ指の一本一本が
触手のようにうねって絡みついて……頭が沸騰しそうだっ」

昨晩はサキュバスに精気を吸われ、さっきはめぐみんの中に
大量に射精しちゃった後だから今日はもう勃たないかもと
思っていたが、そんな心配は無用だった。

「ふん。この程度じゃ音を上げないか。だったら……」

「……っ、はあっ……はあっ……！
なぜ手を止めたカズマ？
私はまだ貴様に屈服していないぞ！」

なっ!!
ぐぃ…
ドキッ
まって!!
ぐっ

ついさっき、めぐみんを大人にした聖剣を披露してやると
ダクネスの視線が俺の下半身に釘付けになる。

「見ろよダクネス。
これがお前が服従を誓うことになる御主人様だ。
これからこいつを前戯なしでお前の奥までぶちこんでやる。
屈強な騎士様がどんな風に泣き叫ぶのか楽しみだぜ」

亀頭部分をゆっくりとダクネスの入り口の位置に押し当てる。

「今まで守り通してきた純潔がこんな最低な男にっ……
よせっ、止めろ！　それ以上は、や、止めろお……っ！」

「エロいだけが取り柄の肉盾が！
今からお前の存在意義を身体に直接教えてやるぜ！」